

写真屋の息子

湯の峰フミコ

小学校からの帰り道、神社の楠が家並みの向こうに見えた。空に向かつて緑の葉っぱを茂らせていた。神社の前を過ぎて角を曲がり、二階建ての長屋が並ぶ細い道を歩く。左手にある写真屋の前で立ち止まり、私は幅一メートルの小さなショーウィンドウを眺めた。幾つかのカメラは何年も同じ場所に置かれていて、古ぼけたレンズが私を見つめているようだった。

小学五年生の私は、ここが自分の家であることを恥ずかしく思い始めていた。一キロほど先に千林商店街があり、大阪でも三本の指に入るほど規模が大きく、各商店は繁盛していた。それに比べて人通りがほとんどない路地みなどところで商売をしている父。ガラスの扉から店の中を覗くと、フィルムが並べられたケースの向こうで、父がカメラの修理をしていた。扉の取っ手を引く。店の中はアルゼンチンタンゴの曲が流れていた。私に気付いた父は修理の手を休め、「おかえり」と言っただけ目尻を下げた。

二階の学習机にランドセルを置いた私は、隣に並ぶ兄の学習机を見た。教科書やノートが出しっぱなしである。兄は中学三年生になって不良と呼ばれる人たちと付き合うようになり、少し荒れていた。一緒に使っている本棚には、私が読む漫画の他に、兄が好む洋楽のレコードやビニール本が並べてあった。店の奥にある現像液の匂いがこもった暗室にも、レコードと裸体の女の人が写っているカメラ雑誌が並ぶ棚があり、親子だと子供心に思ったものだった。

本棚から漫画を抜き取り、階段を下りて茶の間に座った。カーテンの隙間からカメラを修理している父の横顔が見えた。タンゴのリズムにあわせる父の口笛。トンカチや、シユツとレンズの埃払いをする音を聴きながら私はページをめくった。

母が帰ってきた。兄の懇談会だったという。茶の間に上がるなり、母は父を振り返り、吐き出すように言った。

「なあ、あんた。あの子にきつく言うてやって。成績が落ちすぎて、このままやと、どこの高校にも行かれへんなる」

父は修理の手を止めず、「放っておいたれや」とつぶやいた。母は台所に行き、蛇口をひねって水を勢いよく出した。

「あんたは家のこと、なんも考えてへん。お金もないし、狭い家で私、恥ずかしいわ」

父が黙りこみ、私は二階に上がった。

夜遅くに兄が帰ってきた。階下で母と兄が怒鳴りあう声が出て、私は蒲団に潜った。兄が二階に上がってくる足音がした。私は蒲団から顔を出し、暗がりの中で兄を見た。ポマードと煙草の匂いがした。兄は学ランを脱ぎ、畳の上に寝そべった。母が兄を呼び、階段を駆け上がった。そして跪き、兄の脚や腰を掌で叩き始めた。父が二階に上がってきて叫んだ。

「やめろ。やめんかあ！」

父は母の尻を蹴り上げた。母が驚いた顔で振り返った。父は蹴るのを止めなかった。母がうずくまる。何が起きているのかわからなかった。私は目を強く閉じ、悲鳴をあげた。

あたりが静かになって、私は目を開いた。母が部屋の隅に座って泣いていた。兄は仰向きになったままだった。瞬きをしないで天井を見つめている。その目尻から涙が流れていた。窓から月明かりが差し込んで、楠の葉っぱの影が兄の身体に伸びていた。

高校生になった兄は、不良だったことが嘘みたいにお洒落な青年になった。髪を肩まで伸ばし、フォークギターを弾いていた。

ギターを弾く手を止めて、隣で寝そべって小説を読んでいる私に時々、話していたことがある。写真屋だけにはなりたくない。辛気臭い。カメラを見るだけで腹が立ってくるのだと。兄は社会人になってすぐに、一人暮らしをするため家を出ていくことにした。家族が車に荷物を運んでいるあいだ、私は畳の上に置かれたポストンバッグに頭を乗せて目を閉じていた。兄の怒っている声が階下から聞こえてきた。

「あいつが俺の鞆を枕にしてるねん。なんやねん、あいつ」

母が私を呼ぶ声が出た。私はゴロンと転がって、鞆から頭をはずした。階段を上がってくる足音がする。私は背を向けたまま眠ったふりをした。鞆を持ち上げる音。その場に立ったままにいる兄の気配を感じた。階下から父が私を呼んでも、私は眠ったふりを続けた。兄は何も言わず、階段を下りていった。

車の音が遠ざかり、私は起きてゆっくりと階段を下りた。母が台所で、声を出さずに泣いていた。

「お兄ちゃん、行った？」と私は父に尋ねた。父は頷いて、手元にある本を閉じた。ビニール本だった。床に山ほど積まれてある。

「あいつの置き土産」父は寂しそうに笑った。

兄も私も結婚し、父と母は二人きりで過ごすようになった。正月に実家に集まったとき、兄はカメラマンが着るような、ポケットのたくさん付いた茶色いベストを身につけていた。

義姉が私に囁いた。

「この人、カメラ始めたの」

兄が私を見て、照れ臭そうにした。

「ベストがかっこいいから、着たかっただけや」

しばらくして実家に帰ると、すでに閉じている店の壁に、大きな写真が飾られていた。青空の下、逆光を受けたコスモスの花卉が透けている。母が「賞をとったらしいわ。その写真」と目を丸くして私に教えてくれた。

「あいつ、俺より上手い。腹のたつこと」

作業机でカメラを触っている父が、そう言っ私を見上げた。

楠の葉は相変わらず茂っているが、父も母も年老いて九十歳に近くなった。私は遠くに住んでいないのに、年に一度か二度ぐらいしか実家に帰っていない。どうも足が遠のいてしまう。帰るたびに、次に帰るときは生きてくれているのかという気持ちになるからだろうか。今年の正月、久しぶりに顔を出した。

心臓の病と老衰でほぼ寝たきりになっている父の蒲団のそばで、母が言った。

「おとうさん、お年玉の袋には、おとうさんの名前だけ書いたらいいんやろか。私の名前と連名がいいんやろか」

私の子供たちに渡すのに、わざわざ相談している。父は渋い顔をした。私は笑って、父が返事で言いそうなことを先に口にした。

「そんなことも自分で決められへんの？ おかあさん」

さらに笑ってみた。放っておくと、夫婦喧嘩になってしまう。私につられて母も笑った。父は私を見て、静かな声で言った。

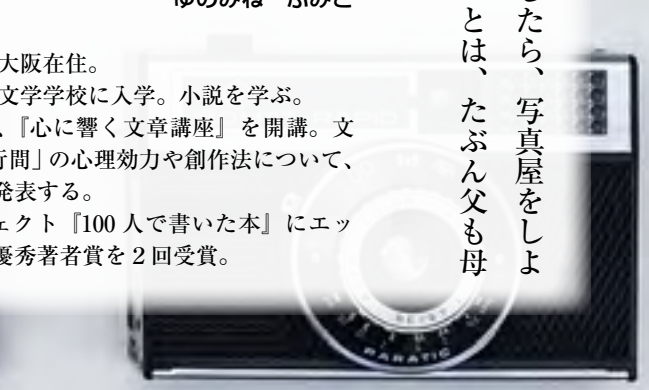
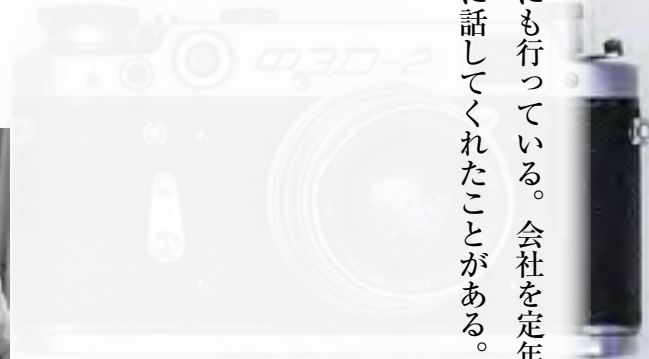
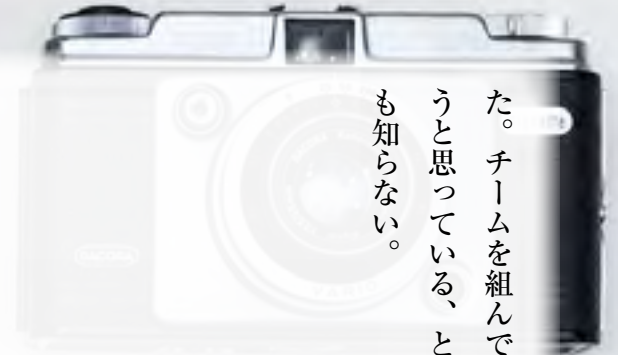
「これでええんや」

喧嘩に割り込んだじゃいけない、と思った。喧嘩しなくなったら、父はすぐにあの世へ行きそうな気がして。

兄は会社帰りに、よく実家に寄っているそうだ。

「急に帰ってくるから、料理が大変」と、母はこぼしながら嬉しそうにしている。店の煤けた壁に、兄が撮った写真が並ぶ。様々なコンテストで受賞するようになった

写真屋の息子



た。チームを組んで撮影会にも行っている。会社を定年退職したら、写真屋をしようと思っている、と兄が私に話してくれたことがある。そのことは、たぶん父も母も知らない。

湯の峰フミコ

ゆのみね ふみこ

本名 仲谷史子
1965年生まれ、大阪在住。
41歳の時に大阪文学学校に入学。小説を学ぶ。
同学校を卒業後、『心に響く文章講座』を開講。文芸に存在する「行間」の心理効力や創作法について、心理学の学会で発表する。
100共著プロジェクト『100人で書いた本』にエッセイを出品。最優秀著者賞を2回受賞。